

風の便り(第62号)

発行日：平成17年2月

発行者：「風の便り」編集委員会

憧れの先生

■ 1 ■ 英語を英語で教えられて当たり前!?

福岡県穂波町は小学校に「話せる英語」を目標としたプログラムを導入している。その縁で穂波に指導者を紹介している英語専門学校の責任者の方にお目にかかる機会を得た。友人の教育長が筆者の英語教育についてのフォーラム論文を英語学校の先生に紹介してくれたのが縁の始まりであった。筆者の講演を傍聴されたあと「試験」に合格したのであるのか、英語教育の指導者に対する講演依頼が廻って来た。当然筆者は英語の専門家ではないが、何ごとも経験である、と考えて引き受ける事にした。

教育の成果はプログラム次第である。英語が話せないのは英語を話す教育プログラムが悪いからに外ならない。講演の依頼者は話す英語を目的として英語教育の改革運動を展開している松香フォニックス・インスティテュートというところである。主宰の松香洋子さんとそのスタッフの共著である「英語のできる12才」という著書をいただいた。

”スキーの先生はみんなが憧れるくらいスキーが上手で、ピアノの先生はうっとりするくらいピアノが上手に弾け、水泳教室の先生はかっこよく泳げるでしょう。それと同じように英語の先生も子どもの憧れを生むようなすばらしい英語を使って欲しいのです。英語を専門とする人は英語を英語で教えられて当たり前だと思うし、そうで無い人は英語教師になってはいけないと思います。”(*1)要するに、英語教師もまた英語コミュニケーションの技術において、生徒の憧れの先生でなければ、生徒の

英語はものにならないという事である。

まさしくご意見の通りであるが、そうすると少なく見積もっても公立学校の英語教師の90%は失業することになるであろう。日本が世界の中で生きて行く、と決心した以上、英語は不可欠のコミュニケーション手段である。それゆえ、教育行政は小学校段階からの英語教育に前向きになった。この機会を逃がしてはなるまい。こんどこそ今までのように教員養成大学で英語の教員免許状を取っただけの教師を採用してはならない。条件は簡単である。上記の松香さんのご意見のように「英語で英語を教えられる」先生を採用すべきである。採用方法はごく簡単である。英語のできる人の前で実演をしてみればいい。かく言うとその種の予備校がまたゼロ出現して、面接用のシナリオを暗記するような対策を取るであろうが、30分も面接すれば実力の無い者は必ず馬脚を表すので心配はない。筆記試験などより評価は遥かに正確である。前々からの筆者の主張であるが、英語のような実技科目は「できる」人だけに免許状を与えるべきである。現状では、文部科学省のトップも、地方教育行政のトップも英語で英語を教えられないことは自明なのだから、この際英語を英語で教えている人々の意見を聞くべきであろう。いただいた本を通読して共感するところが多く、刺戟を受けて小論を展開する気持ちになった。

(※1) 英語のできる12才、松香洋子ほか著、松香フォニックス研究所、2000年、10月、pp.81~82

1. 憧れの先生 p 1

2. 「自主学習」時間の時間割 p 4

3. ゆとり教育の崩壊—プログラムの不在— p 6

4. Message To and From p 9

5. 第54回生涯学習フォーラム報告 p 10

6. 編集後記

老境の誕生日 Golden Days!? p 12

■ 2 ■ 言語は「型」

作法が礼儀正しい「態度と行為の型」であるように、親切な行為は「思いやりの型」である。当然、言語もコミュニケーションの「型」である。「文型」というのがその証拠であろう。日本語に「型」があるように、英語にも「型」がある。日本語の習得が、日本語の「文型」の習得であるとするならば、英語の習得も同じく、「文型」の習得ということになる。文法の基礎が大事なのは「文型」の成り立ちを理解

するためである。もちろん、受験問題に登場するような高度にして難解な「文型」や文法はコミュニケーションの英語には不要である。われわれの日常的コミュニケーションがどの程度の種類と数の「型」を使うかによって、文型もその基礎となる文法も教えればいい。

■ 3 ■ 学校英語は「型」を習得させていない

コミュニケーションのできない学校英語の状況を延々100年以上も許して来た文科省はまともではない。現在の日本経済がおかれた怒濤のような国際化の波を思えば狂気の沙汰と言っても過言ではない。普通の日本人は最低でも6年間英語を学んでいるのである。高校進学率が90パーセントを優にこえる世界一の中等教育を擁しながら、中学3年、高校3年の6年の英語教育はほとんど実らない。

大学を出ても話せないのだから、と国民の多くはすでに諦めている。英語への向学心は消えていないのに、自分が英語が話せるようになるとは期待していない。学校英語は英語の「文型」を体得させていないのである。多くの関係者は、母国語が十分に出来ないのに英語ができるようにはならない、という迷信をまき散らす。しかし、「話す事」と「話す中身」は別の問題である。議論の中身は教養の中身に限定されるが、言葉が「文型」である以上、「型」を学びさえすれば、会話力は基本的に母

国語のレベルとは関係がない。外国にはもちろん、日本国内にも、英語教育のモデルはふんだんにある。都市にはいたるところに様々な英語学校があって現実に機能している。これらの学習モデルが学校教育に取り入れられない理由はたった一つである。それは、誰かが「現状でいい」と主張しているからである。現状を容認している根源は教員制度である。換言すれば、英語教員の免許状制度が変革を拒んでいるのである。英語を話せない教員に話せる英語を教えられる筈はないからである。制度改革に着手せず、現状を放置している一方の代表が文部科学省である。他方の代表は、中学から大学までの日本人の英語教員である。多くは、英語を使って十分なコミュニケーションが出来ない教員である。当然、「英語で英語の授業はできない」。残りは、コミュニケーションの英語をばかにして英米文学を専攻している教員である。

■ 4 ■ 「型」の指導の特性

「型」の教育は意味が後から来る。子どもは「型」を自分では選択しない。「型」は先人の知恵として子どもの興味／関心の以前に「先在」している。子どもの興味・関心の故に「型」をきめるのではない。「型の中身」に価値があるので「型」が採用されるのである。それゆえ、「型」の指導は「子どもの主体性」論と正面衝突するのである。「型」の指導は、子どもの興味・関心を前提としない。それゆえ、主体性を無視した「詰め込み」であ

る、という非難が生じる。反対論の根拠は間違っていない。「型」は究極の「詰め込み」である。しかし、「究極の」とは単なる知識の詰め込みではないという意味である。「型」の指導は「体得」の指導である。それゆえ、身につくまで反復練習をくり返す。「型」の指導は「子どもの主体性」をある程度無視せざるを得ないのである。「主体性」や「自主性」は「型」の枠内でしか認めない。学ばべき「型」の枠の中で『君ならどうする？』と聞くにとどま

る。

「型」の指導の基本は「詰め込み」であるが、必要な基本的能力を詰め込むのは当然である。詰め込んでもらえなかった子どもの不幸を考えて見れば明らかであろう。「型通り」は、確かに「創造」の反対の極にあるが、対抗すべき型枠がなければ、それを打破するような創造性は生まれる道理がない。「創造力」こそは「基本型」に

精通した人間による「型」の破壊であり、革新である。「型」の指導は知育ではない。「型」は体験を通した「体得」である。英語を話せないのはコミュニケーションに必要な文の「型」を「体得」していないからである。

■ 5 ■ 子どもの英語の最大の危険

日本人の英語の最大の難所は二つある。ひとつは「楽しみ」、他のひとつは「発音」である。「楽しみ」は受験英語が初めから殺してしまう。ひたすら間違えることを恐れ、コミュニケーションのためではなく、知識のため、試験のための学習が楽しい筈はない。第二の鬼門は聞き取りである。聞き取りが出来ないことは、発音が出来ないことに直結している。それは50音の言語の宿命である。特に、現代日本語の50音は、「ヴ」の文字も、「Wi」の文字も消してしまった。『R』と『L』は区別出来ない。さらに、「F」の音も、「TH」の音も存在しない。それゆえ、「F」も、「TH」も発音できず、「V」の音にも「Wi」の音にも、特別の注意は払わなくなった。曖昧母音も当然発音できない。50音に縛られて言葉を学ばわれわれ日本人には、50音以外の音は聞くことが難しい。聞くことが出来なければ、当然、発音は出来ない。もちろん、このことは日本の子どもが、外国の言語の音を聞く能力を持たないということではない。50音に縛られてそれ以外の音を聞いていないと、聞きとりの能力が減退してしまうということである。その証拠に幼少期から外国で暮らした帰国子女は外国語の音を聞く耳を発達させている。国際結婚の結果、英語を母国語とする外国人の親から幼い時の発音を学んだ日本人の子どもも外国語の音を聞き分けることができる。

それゆえ、聞き取り能力の最大の問題は、ヒアリングの能力を開発する幼少期—少年期の環境である。中学生の多くはすでに曖昧母音の音を聞き分けることは出来ない。こと、発音の習得に関しては、小学生から始めることが望ましいのはいうまでもあるまい。しかし、問題は日本人教員である。50音の発音しかできない日本人教師に習うのは致命的な失敗である。教師の側もまた幾つかの音を聞き分けることが出来ず、当然、発音することも出来ない。子どもの英語教育は断然英語の発音のできる外国人教員によらなければならない。話す英語に重点をおくならば、ポイントは、楽しみとヒアリングと発音である。東後は英語学習の観点から子どもの特質を次のように要約している。東後はこれを「天性」と呼ぶ。天性を英語学習に活用しない方はない。

- (1) 子どもは素直
- (2) 子どもは耳が敏感
- (3) 子どもは物まねの天才
- (4) 子どもは恥ずかしがらない
- (5) 子どもは好奇心のかたまり
- (6) 子どもは人の言葉をよく聞く
- (7) 子どもはすぐに行動に移す
- (8) 子どもは身体で覚える
- (9) 子どもは外国語を意識しない
- (10) 子どもはくり返しを嫌わない^(＊2)

東後の指摘を、アメリカの子どもの英語の覚え方を研究したシングリッド・H・塩谷の観察と比較してみると共通点が多い。塩谷の観察結果の中から一般化できそうな項目を列挙すれば以下のようである。^(＊3)

- * アメリカ人も英語を間違いながら覚える
- * 周りの音は何でも真似してみる
- * ものや人の名前を最初に覚える
- * 少ない語彙で必死に表現する
- * 子どもには英語も日本語も同じ
- * 動きが目に見える動詞は速く覚える
- * 意味に幅のある動詞はたくさん聞いて覚える

東後も、塩谷も、子どもは真似をすることで覚え、使うことで身につける、と言っている。当然、「物まねの天才」に不適切なモデルを与えることは最悪である。不適切なモデルとは、50音に制約された発音、正しい言い方だけを教えようとする指導法、英語を使わない環境の三つである。小学生の英語教育を日本人教員で始めることは、話す英語の自殺行為である。

(＊2) 東後勝明、子どもの英語いま、こんなふうに、BL 出版、1998年、pp.20～21

(＊3) シングリッド H・塩谷、アメリカの子どもはどう英語を覚えるか、はまの出版、1991年

筆者の英語は残念ながら一昔前のジャパングリッシュである。田舎の育ちであるから英語の正しい発音など習えるはずはなかった。しかし、アメリカの田舎の英語環境で苦労して覚えたので、相手が注意して聞いてくれれば十分通じるのである。アメリカの大学の講義でも学生達は理解した。それゆえ、いささか迷惑の押し売りの感はあるが公民館の英語講座をボランティアで担当している。目的はいろいろあるが、その一つは自分の英会話学習／英語教育の考え方を証明するためである。いまのところ学習者の大部分は成人の市民である。皆さん50音との違いを意識していない分だけ発音はひどい。また、学校英語の学習法に慣れていて、英会話のクラスであるにも関わらず、話したり、聞いたりする以上に必死にノートを取る。それゆえ、たびたびノートを取る事を禁じて会話に集中させる事になる。最近、寺子屋の手法に倣って、音読、暗唱、朗読、ストーリーテリング、

英語劇などを取り入れてもつばら実践的な会話練習に集中している。日本語を使う事は全面禁止である。筆者の方法は上記の通りである。50音に制約された発音を是正する。正しい言い方をひとつだけを教えようとする指導法は取らない。たえず英語を使い、日本語は厳禁する。ようやく中年および熟年学習者が英語を話すようになりつつある。来週はささやかながら、初めてのスピーチ・プレゼンテーションを行う。4月からの新学期は、いつでも、誰でも原則には反するが、クラスをこれまでのように分散せず、学習者を限定して継続的なスピーチのトレーニングを始めてみたい。「英語のはなせる12才」が実現できるなら「英語のはなせる熟年」も実現できるはずである。来年の今頃は「風の便り」紙上にスピーチ・プレゼンテーション大会のご案内を載せたいと夢見ている。

「自主学習」時間の時間割 —放課後児童健全育成事業のジレンマ—

新年度の準備に迫られる「豊津寺子屋」の実行委員会では、「自主学習」環境を制御すべき具体的なプログラムの設定を巡って種々意見の交換が行われた。以下は具体的な「自主学習」時間割を作成する上で配慮が必要であると指摘された考え方や活動プログラムの中身と方法の一覧である。

1 「自主学習」を子どもの自主性に任せてはならない

「保教育」の概念を全面に打ち出した「豊津寺子屋」事業がいよいよ新年度から本格的に始まる。学童保育の担当者が苦労したであろうように、「豊津寺子屋」でも、平日の放課後は、一度に子ども達は集合できない。子ども達が全員揃わない前半の1時間30分と全員が揃う後半の1時間30分はプログラムの対応を工夫しなければならない。学校の授業はさみだれ式に終わる。それゆえ、前半は、三々五々に集まってくる子ども達を収容して、静かに自主学習をさせなければならない。特に、今回は学校の協力が得られて、初めは、本校舎内の三つの教室に、順次、授業の終わった子ども達を収容する。それゆえ、低学年の授業が修了しても、高学年の授業は続いていることになる。集合した子ども達が走り回ったり、大声を出したりすれば、授業の妨害になるば

かりか、預かった子ども達の教育効果は吹っ飛んでしまう。当然、「寺子屋」は信用を失い、“それ見たことか！”と学校側の失笑を買うことになるであろう。宿題をしなさい、本を読みなさい、というようなことでは保教育の指導をしたことにはならない。しつけの行き届いていない子ども達に「自主学習」を指示しただけでは事は全く解決しないのである。「自主学習」といいながらも、自主性が確立していない子どもの自主性に任せて放置すれば、「自主学習」環境は崩壊する。恐らくは、これまでの学童保育が苦労したであろう「自主学習」のジレンマがここにある。かくして「自主学習」といいながらも、全学年の児童の授業が終了するまでの約1時間30分の活動の「中身と方法」が問われることになる。それが「自主学習」の時間割である。学童「保育」が学童の「保教育」

になるためには「自主学習」の時間割が決め手である。

2 「授業の束縛」からの解放

わくわくする時間—くつろぎの時間をどう始めるか！？ 授業が終わって帰ってくる子ども達は解放感に溢れていることだろう。それを再び「自主学習」とか「宿題サポート」という固い「学習」概念の中に閉じ込めてしまうのは「酷」というものである。しかし、校舎内では高学年の授業が続いているのだから、スポーツや遊びに外を駆け回らせるわけには行かない。授業から開放された「くつろぎの時間」が必要であり、子ども達のエネルギーの方向転換を図る「わくわくする飽きない時間」の工夫が不可欠である。全学年が揃うまでの「待機」時

間は、『自主学習—宿題サポート』の総称で呼んでいるが、中身は子ども達を「学校授業の枠」から解放できるわくわくするような楽しいことから始めなければならない。学童の「仕事」が勉強であれば、授業は「義務」であり、授業の終りは「義務」からの解放である。「義務」は束縛であり、その反対語は自由である。それゆえ、学童のくつろぎの時間は自由の感覚に溢れた「義務」からの解放でなければならない。当然、「仕事」の反対語は「遊び」である。室内遊びから自主学習時間割を始める理由がここにある。

3 低学年の自由感溢れる遊び

低学年児童は長い集中や緊張には耐え得ない。だからこそ学校の授業も早く終わるのである。それゆえ、放課後の低学年の活動は気楽にくつろいで、楽しめる室内遊びから開始するのは必然である。しかし、学校の授業が平行して行われている以上、「寺子屋」の1時間目は通常、身体活動や大掛かりな遊びには使えない。体育館も、運動場も高学年児童が使用している可能性が大きいからである。

それゆえ、遊びは室内遊びに限定せざるを得ない。もちろん、室内遊びと言っても、中身は子どもの活力を取り戻し、好奇心や興奮をかき立てるようなものを工夫する事が重要である。授業に集中していたことを前提にすれば、気も、心も、肩や首筋、背中や足腰等の肉体も、がちがちに凝り固まってしまうだろう。彼らが自由時間に奇声を上げて走り回り、ボールを蹴りまくるのは肉体と精神の凝りと固さをほぐすためであることは言うまでもない。しかし、「自主学習」の時間帯はまだ校舎内で高学年の授業が続いているのだから、凝り固ま

ってしまった心身をほぐすにしてもそれなりの手だてが必要になるのである。まずは寝ころんで背伸びをすることから始める。それゆえ、畳やじゅうたんを敷いた家庭科室を使うのが理想である。寝転んだり、車座に坐ってできる活動はなにか？それがカルタや読み聞かせであろう。紙芝居もいい。将棋やトランプゲーム、碁なども室内ゲームには適している。子ども達が十分リラックスしたら、次は「宿題サポート」に代表される自主学習を始める。まずは氣息を整えるための音読である。先生に従って一行ずつゆっくり声を出して読んで行く。高学年生を含めて、全員が揃ったら又音読があるので、「初めの歌」とは別に俳句カルタや短歌を応用すればいい。子ども達が氣息を整え、気分を一新した段階で宿題はもちろん、読み聞かせ、読書、漢字の練習、計算練習、音読練習、カルタ取り、作文練習、家族や友達への手紙の練習、スケッチ、その他子どもが騒がない工夫をした室内遊びを導入することができる。

4 低学年による整理整頓活動

通常、学校の授業は4時30分には終わる。1～6年までが揃えば、原則として、運動場や体育館に集合することになる。そのため、4時15分には使用した本校舎内の教室を清掃し、翌日からの学校活動に支障を来たさないように配慮しなければならない。本活動開始前の整理整頓は、日常生活習慣を確立する上でも、社会的役割や責任を教える上でも重要な機会である。指導者は掃除の手順、整頓の方法、グループごとの役割と責任の分担などを徹底することが重要である。掃き

掃除はもとより、寝転がったところはふき掃除が必要である。タオルも絞れない近年の子どもには絶好の練習機会である。遊びに使ったカルタでも、碁将棋でももとの箱に収め、学校の備品類は指導者の指示でもとの場所に返す。整理整頓は教室を利用した低学年の児童の役割であり、責任である事をしっかりと教え、整頓活動を習慣化することは自立の第1歩になる事は疑いない。「来た時よりも美しく」は「寺子屋」活動の原則であることは言うまでもない。 ■

ゆとり教育の崩壊

● —プログラムの不在— ●

● 1 ● 「教育力」の概念

以前にも論じたが、教育力の要素を大別すると、「教育環境」と「学習プログラム」になる。従来、筆者は、教育環境が「全体」で、そこから生み出される学習プログラムが「部分」であると考えて来た。しかし、「全体」と「部分」を逆転する発想も可能である。なぜなら、教育意志を実現するためには、いかなる教育環境も、学習プログラムの提供に始まる。学習プログラムの反復によって、教育環境が醸成されたのである。教育環境が初めにあったのではない。このように考えれば、「教育意志」が出发点であり、意図的な教育「プログラム」が初めにある筈である。換言すれば、「環境」も、「風土」も、「人間関係」も、具体的な学習プログラムの実施過程で生み出された条件である。もちろん、ひとたび出来上がった教育環境は、それを土台にして次なる新しい学習プログラムを生み出すから、一度学習環境が醸成されると、学習環境が「親」で、学習プログラムが「子ども」になるような関係が生じる。両者の関係は、双方向である。

プログラムと環境の「弁証法」である。然るに、子ども次第で親が変わることはいくらでもあり得る。「プログラム」のあり方が「教育環境」を変えるのである。

当然、「環境」と「プログラム」の間には「偶発性」と「計画性」の違いがある。教育プログラムは意図的であるが、教育環境や人間関係の中で発生する学習は偶発的である。既存の「教育環境」、「教育風土」、「人間関係」などから自然発生的に生じる学習はあくまでも偶然で、気紛れである。それゆえ、偶発的に行なわれる「学習」を、意図的、計画的に行なわれる教育行政の指標に含めるべきではないと考えたのである。そこで、「教育環境」、「教育風土」、「人間関係」など、重要ではあるが、包括的で、漠然とした概念を教育力の構成要素からはずして考えてみた。

● 2 ● 「ゆとり」と「充実」の条件

教育力の基本がプログラムであると言う考えに立てば、土曜日の教育力とは、土曜日に提供される子どものための学習プログラムの総体である。当然、教育成果はプログラムの中身と方法次第である。したがって、学校週5日制を導入しても、「ゆとりと充実」が同時に実現できることにはならない。それゆえ、学校5日制を「ゆとりと充実」のスローガンで飾ることは「まやかし」に近かったのである。

実態としての学校週5日制は教職員の週休5日制の言い換えであり、子どもにとっては、単に、土曜日が

休みになるということを意味しているに過ぎなかった。それは、子どもにとって、これまであった土曜日の学校プログラムが消失するということである。プログラムが教育力の核心であれば、土曜日の「学校プログラム」が消えた分だけ、「教育力」が低下するのは当然である。土曜の学校プログラムが過密の原因であったすれば、土曜を休みにすることは確かに「ゆとり」に繋がる。しかし、選択肢の中には、「過密の学校」を「過密でない学校」に変えるという方法もあった筈である。後者を選ばず、土曜を休みにしたのは、「学校のゆとり」が本来の目的

それゆえ、もちろん、新しい「休み」が「ゆとり」や

● 3 ● プログラムの欠落—「ゆとり教育」の崩壊 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

「生きる力の教育力」とはなにか、「たくましさの教育力」とはなにか？教育機関の教育力が問われ、季節の教育力が問われ、曜日の教育力が問われるのであれば、特定の目標のための教育力も問われなければならない。学力が心配なら「学力」を向上させる総合的なプログラムが不可欠である。「やさしさ」が足りないのであれば、やさしさの実践プログラムが必要なのである。「社会性」の陶冶についても同じである。責任感の体得についても同じである。教育力の低下はプログラムの補強によって補う事ができる。「教育意志」は教育プログラムによって実現するのである。それゆえ、補完プログラムの不在こそ日本教育界における熱意の不在の証明である。

MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 北九州市 米原芙美子 様

はからずも「郷愁の啄木」を聞いていただきました。八幡福祉市民センターの仲道さんの企画に乗せていただいたのですが、参加者の中に一緒に口ずさんでいる年輩の方がいらっやあって心強い限りでした。「型」の指導は、今後、言語や作法の習得に留まらず、間違いなく子どもの日常のあらゆる領域において再評価を受ける日が来ると実感しております。

不登校も、非行も、引きこもりも、問題の発生源を放置したまま、スクールカウンセラーを配置したり、問題行動に苦しむ子ども達のケア担当者を新設しても事は解決しません。人件費と時間の無駄を積み上げている現行の教育の考え方が最大の問題であると考えようになりました。

★ 福岡県甘木市 太田政子 様

先日、「若葉マーク」と「紅葉マーク」を上下にはった車に出会いました。他の車はさわらぬ神にたたりなし、

を決め込んで車間距離を保つようにしていました。おずおずと、細心に、かつ大胆な運転でした。失礼ながら吹き出してあなたを思い出しました。「風の便り」もこの方式で行こうと決めました。

「ほりえもん」の日本放送株の買収を巡って、古い世代の体質が露呈しました。古い日本型資本主義の自己保身の精神論がメディアを賑わせています。彼らは、日本のあらゆる組織がそうであるように、資本主義社会にありながら会社の運営に「自己都合主義」マークを付けているのです。ライブドアは資本主義の論理に従っているだけで、違法なことはしていません。いつもの事です。自分に都合の悪いことが起ると制度のせいにする。制度に問題があるのなら最初から制度を変えておくべきです。この国は「論理の赴くところ」へはなかなか行きません。今回、ライブドアは古い体質の人々の妨害で失敗するかも知れませんが、彼らの試みの正しさはいずれ歴史が証明するでしょう。

購読手続きにあたっては過分の郵送料をありがとうございました。お礼が遅くなりましたがご支援に

あらためて感謝申し上げます。

福岡県宗像市 市津順子 様
石川県金沢市 鯉野利美江 様
福岡県嘉穂町 實藤美智子 様
広島県呉市 芳川雅行 様
福岡県久留米市 瓜生浩平 様
長崎県長崎市 武次 寛 様
佐賀県佐賀市 小副川ヨシエ 様
島根県雲南市 多根公民館

北九州市 米原芙美子 様
高知県野市町 小松義徳 様
長崎県長崎市 松尾恵子 様
福岡県甘木市 太田政子 様
北九州市 小中倫子 様
福岡県甘木市 佐藤尚志 様
福岡県穂波町 下村和子 様
福岡県宮田町 植田武志 様

長崎県長与町 浦川末子 様
佐賀県佐賀市 城野真澄 様
鳥取県南部町 石塚智康 様
島根県益田市 渋谷秀文 様
鹿児島県始良町 麓 宏吉 様
東京都 池田和子 様
福岡県穂波町 橋爪智明 様
福岡県穂波町 行徳良昭 様

第54回生涯学習フォーラム報告

第25回大会記念の出版を前提とした事例の再整理と背景の分析作業を続けている。3回のフォーラムを経て、3本の論文と8つの事例の整理を終了した。このペースで作業が進めば、年内に作業を終え、来年の5月には参加者に新しい本をお届することができる。

第54回のフォーラムでは2つの事例を分析した。一つは、福岡県立英彦山青年の家が実施した「やまびこの杜(セカンドスクール in 英彦山)」である。主題は「自然・生活体験活動を推進する社会学連携・融合の具体的方策」である。事例の整理は福岡県教育庁の樋田京子主幹が担当した。他の一つは長崎県壱岐市立霞翠小学校の実践；「目標は『タフな子ども』―地域と共に歩む学校の創造」である。整理は三浦清一郎が担当した。

個々の事例については前回と同様、内容・方法はもとより、実践の先駆性、革新性、応用可能性、想定される社会的、経済的、政治的效果などを報告した。また、論文発表は、「少年の鍛錬」である。鍛錬プログラムの具体例として、霞翠小学校の「タフ事業」と前回報告で取り上げられた福岡県立社会教育センターの恵良 章治さんが整理した福岡県古賀市青柳小学校の実践「青小唐津まで歩くんジャー」の背景を分析した(整理担当、福岡県立社会教育センターの恵良章治さん)。事例の紹介は省略するが、論文の骨子、議論の方向は以下の通りである。

1 なぜ、今、「鍛錬」なのか！？鍛錬プログラムの不可欠

子どもは協力体験から「協力的態度」を学び、責任遂行体験から責任感を学ぶ。困難体験がなければ困難に耐えていく力は身につかない。社会参加体験がなければ社会性は育たない。それゆえ、各種体験の「欠損」は意味重大なのである。本人にとっては取り返しがつかない。上記の体験が欠損している分だけ子どもの学習は行なわれないと言うことを意味しているからである。

知識は教室で学ぶことが出来る。しかし、感情や態度、行為や作法を学ぶ事は容易ではない。責任の重要性を説いても責任感は育たない。がまんすることの大切さを説いても根性は育たない。ましてや、親切、いたわり、共感、思いやり、連帯など人間にとって微妙な側隠の情は、自らの体験抜きに身につけることはほとんど不可能である。

これまでの教育が「頭でっかち」を育て続けたことは「教室主義」、「知識主義」の必然の結果である。保

護者もこの単純な論理を鵜呑みにしてきた。学校教育の「誤り」という言い方は軽すぎる。それは教育行政と学校の過失犯罪に近い。親の過保護と過干渉が問題であるという社会の言い方も軽すぎる。保護者の愛情に疑いはないが、過保護・過干渉を修正できないのは、子どもの未来に対する無責任に近い。体験を通した「体得」こそが「生き方の社会化」の鍵だからである。中でも「体力」は生き物が生き続ける土台である。体力が尽きれば、生き物の存在が終わる。「耐性」は社会的動物の基本条件である。社会はルールを定め、規範を確立して人はそれに従う。資源をわけあい、共同生活を営むためには多くの場面でがまんせざるを得ない。やりたくてもやってはならないことは多い。やりたくなくても責任や役割は果たさなければならない場合も多い。体力も、耐性もプログラムの成果として向上する。鍛錬プログラムが不可欠な所以である。

2 鍛錬の空白と耐性の欠損

「鍛錬」とは金属を鍛えることであり、「習い極めること」であり、修業や修練を積むことである(広辞苑)。家庭の教育力があり、地域の教育力があり、夏休みの教育力があり、土曜日の教育力がある以上、教育力が達成すべき中身が問われる。それぞれの教育力は少年に何をもたらすのか？戦後日本の教育が反発して来たものの筆頭は「鍛錬」であろう。鍛錬が厳しい修業の別

名であるとするれば、戦後の子ども達は、子ども時代の心身の修業を経ずに、突然、思春期に至って「受験勉強」という“擬似修業”に放り込まれて来た。結果的に、現代の少年はひ弱である。体力的に親の世代に劣り、耐性に至っては先輩世代とは比較にもならない。些細なことに「切れる」のがその証拠であり、わずかの困難で挫折するのもその証拠である。「不登校」も「引きこもり」も、

多くの非行も基本的に耐性の欠如が原因である。その他子どもを巡る諸々の問題で彼らの「体力・耐性」の低さが関わっていない問題はない。現代の学校にもっとも欠けているもの、現代の地域には存在しないもの、現代の家庭が忘れ果てたもの、それが少年の心身の「鍛錬」である。それゆえ、今、少年の自立にとっても、学力

の向上にとっても、社会性の陶冶にとっても、もっとも重要な条件、それが「行動耐性」であり、「欲求不満耐性」である。この二つを欠けばあらゆるトレーニングは成り立たない。そしてもちろん、心身の体力・耐性を養うもの、それが少年の鍛錬プログラムである。

3 鍛錬アレルギー

日本には鍛錬アレルギーがある。戦後日本の教育は、戦前の苦い体験から、「鍛錬」という用語自体に感情的に反発した。恐らく、そうした心情的反発の背景は、本来の「鍛錬」概念そのものではない。「鍛錬」の名のもとに行われた戦時下の異常な「軍事教練」や「学徒動員」の否定であり、「後遺症」である。それゆえ、不幸にも、戦後の「鍛錬」概念は「軍国主義」教育を連想させるマイナスイメージを背負い続けて来たのであろう。

結果的に、内容的にも、方法論上も「鍛錬」の教育力は空白になった。当然、鍛錬の機会を失った子ども達はへなへなになった。教育力がなければ子どもの成長・発達を促すことはできない。朝礼に立っていられない子ども、わずか45分の授業に集中して机に坐っていることの出来ない子ども、鍛錬の空白の象徴である。敗戦から60年を過ぎて、ようやく近年、教育界も子どもの実態を直視せざるを得なくなった。子どもを鍛えなくていいのか、というまともな疑問を発する人が増え始め

た。ようやく、本来の鍛錬プログラムの期が熟し始めたということである。長崎県はモデル事業の表題・目標に「タフな子ども」を掲げた。壱岐市の霞翠小学校の「タフな子どもを育てる」モデル事業はその本質において鍛錬の教育力の復活に挑戦している。また、福岡県古賀市の青柳小学校が行った「唐津まで歩くんじゃー」事業も方向目標は同じである。毎年、遠泳で錦江湾を横断するという鹿児島市の松原小学校の伝統も薩摩に細々と続いて来た「山坂達者」の鍛錬伝統の遺産であらう。

しかしながら、多くの通学合宿は子どもの自立を目標に掲げながら、いまだ「鍛錬」にほど遠い。少年自然の家のプログラムの多くも、いまだ「鍛錬」にほど遠い。モデル事業「タフな子ども」の概念も多くのモデル校で、いまだ明確には提示されていない。戦後教育にとって、「鍛錬」プログラムはようやく新しい試行錯誤が始まったばかりなのである。

第55回生涯学習フォーラム

日程の変更に御注意下さい！！3月のフォーラムは第2土曜日です。

フォーラム実行委員会では第25回中国・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会を期して記念出版を行うため編集の準備を開始しています。そのため当分の間、各地の事例発表のお招きはお休みとし、代わりに、過去の「交流会」の発表の中から注目すべき事例を選び、その意義と内容・方法を実行委員の持ち回りによりそれぞれが小論文の形にまとめて発表する形式を取ります。

日時：平成17年3月12日(土)15時～17時
のち「センターレストラン『そよかぜ』にて夕食会」

場所：福岡県立社会教育総合センター

テーマ及び事例取りまとめ者：

- 1 重松孝士（発表事例未定）（福岡県立社会教育総合センター）
- 2 永淵美法（発表事例未定）（九州女子短期大学）
- 3 三浦清一郎 「『セカンドスクール』構想の多様な意義と役割(仮)」

フォーラム終了後センターレストランにて「夕食会」を企画しています。ふるってご参加下さい。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。（担当：朝比奈）092-947-3511まで。

■■■■■ 老境の誕生日—Golden Days!? ■■■■■

誕生日はもっとも分りやすい人生の区切りである。しかし、老境に踏み込んだ後は、誕生日は衰弱と死に向かって降下する区切りの階段である。そう思えば誕生日の目出たさも明らかに“中ぐらい”である。心身のおとろえを実感している昨今ではなおさらである。誕生日の感想を聞かれたので、思った通りの気持ちを漏らしたところ妻にいたく叱られることになった。老境に入りながらいまだ人生への感謝の心が足りず、未熟である、ということであった。

言われてみれば筆者の日々はやさしい人々に恵まれている。いつものように友人・知人からカードやプレゼントもいただいた。日課のプールから帰宅してみたら、玄関先が真っ赤な薔薇や紅白の胡蝶蘭の花で満たされていた。この十数年誕生日のセレモニーとなった長い付き合いの友人の心づかいである。夜は教え子の心尽くで久々に贅沢な夕食をふるまわれた。倅夫婦のプレゼントも届き、外国暮らしの娘のメールも届いた。

感謝の思いが足りないと指摘された通り、老いの身でありながらここ6年医者のお世話になっていない。死亡率100パーセントの老境としてはありがたい話である。毎日、生涯スポーツの友となった愛犬カイザーと森林公園を駆け巡り、そのあとは妻のお供をしてプールで泳ぎ、サウナとジャグジーを楽しんでいる。3度の飯もうまい。眠りも深い。

現役時代の付き合いはこちらから断ったが、苦境時代にも変わらずに信頼を寄せてくれた友人との交流はいまだに続いている。月の3分の1は講演や会議に招きを受け、残りは執筆に没頭している。職を引いた後も、それなりの稼ぎも続けており、書きためた原稿は「生涯学習通信」として発表し、多くの人々が読んでくださって

いるだけでなく、新しい出版の可能性も出て来た。心身の機能が落ちたとは言え、若い頃と比較すること自体、比較の基準が間違っているであろう。

妻からは、職にあった頃のストレスや苦労や中傷を思い返せと言われた。まわりの人間の多くは面従腹背、エネルギーは抵抗勢力との戦いに費やし、しかもやりたかった大学改革はほとんど実現しなかった。もちろん、家族と過ごす時間はなかった。息子は孤独な受験勉強に耐え、父は全くなりになってやる事無く、孤独な改革への挑戦に翻弄されていた。当然、自分の時間はなかった。

健康を維持しながら、自分の能力を専門職業と結び付け、人々のお招きを受けられる今こそが Golden Days なのだと妻は言う。現在の境遇は“中ぐらい”の目出たさではない。最高の目出たさなのである。それをありがたいと思えないのは、いい年をして「足る」を知らない人間の未熟なのだ！

そのとおりであろう。一日は24時間、一年は365日、人間の寿命は高々100年。時間は公平であり、誰の人生にも至る所青山あり、生老病死はこの世のならいである。わが人生は白秋の終りに近く、日はすでに地平の遠くに傾き Golden Days のかがやきは夕映えの金色かも知れない。しかし、年をとったのだから仕方がない。時間は公平なのだ。欲張りもいい加減にしない、ということであった。

『編集事務局連絡先』（代表） 三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵厳寺2丁目15-16

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。ご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90 円切手 10枚、または、現金 900 円をお送りください。

尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。『オンライン「風の便り」』

<http://www.anotherway.jp/tayori/>